

韓・日経営行動の原点とその構造

金 鏞 淇*

目 次

I 序論

1. 韓・日経営行動理論の概要
 - (1) 日本の集団主義文化
 - (2) 欧米の個人主義文化
 - (3) 韓国の集団主義文化

2. 問題の提起

II 人類の発祥と稲作の起源

1. 地球の年代
2. 新生代の人類
3. 食料生産革命と稲作の起源
 - (1) 後氷期気候変化の影響
 - (2) ヨーロッパにおける人類の適応
 - (3) 食料生産革命
 - (4) 農耕・牧畜の波及
 - (5) 稲作の起源と伝播

III 人種と民族の生成、並びに「人類」としての意識

1. 人種
 - (1) 人種の本質
 - (2) 世界の人種
2. 民族
 - (1) 民族の本質と言語
 - (2) 世界の民族
3. 韓・日とヨーロッパの民族考

* 啓明大学校産業経営研究所特別所員，嶺南大学校名誉教授

4. 「われわれ人類」としての共同意識

IV 遺伝と脳の機能

1. 遺伝子の構造

2. 脳の組織と機能

(1) 組織

(2) 機能

(3) 環境と脳の発達

V 民族の生業と行動構造

1. 検討の単純化

2. 狩猟民族の行動

3. 稲作民族の行動

VI 集団主義経営行動の本質と変異

1. 本質の再検討

2. 分岐

3. 変異

4. 対応——行動の自己調整

VII 結論

I 序論

1. 韓・日経営行動理論の概要

(1) 日本の集団主義文化

日本は、その基層文化が農耕文化であるから集団主義的となり、これを基盤として、いわゆる日本的経営・日本型資本主義が形成されるとみなされている¹⁾。これにより、公益は私益に優先し、お家の為とならば個をかえりみずひたすら忠誠をつくす。所属団体に対する帰属意識が強く団結力がかたい。団体もまた個を親身の如く大切にする。これが、経営にあらわれると、当然、終身雇用制・年功序列制・稟議制度・特殊福祉制度・企業別労働組合制度等の特徴となってあらわれる。

これらは、一面非合理的であるともおもわれるが、非常に強い団結力をあらわすことともなる。終身雇用制は、不況のときも人員削減を困難にし経営の重荷となる。しかし、これが原動力となり社員一体となって不況を克服し、経営の体質はかえって一層強くなる。年功序列制は、一見インセンティブに欠け能率があがらないともおもえるが、これあるが為に先輩は後輩をよく導き、後輩は先輩を敬い、職場は整然と秩序が保たれ、経営の体質はやはり益々強くなる。

このように多くの長所があるが、あまりにも団結力が強く長所がそのまま短所となってあらわれることもある。組織の中に個が埋没されその個があまりにも犠牲となり独創性が失われるばかりでなく、個人的な倫理観と集団的行為の乖離を来す。

そこで、日本的資本主義なくして何の日本か²⁾、等といわれている反面、このような集団主義的思潮が果たしていつまでも存続できるであろうかという懸念もおきている。すなわち、不況が深刻になれば、どうしてもリストラが進行することとなり、集団主義が秘める非合理的要素の為に、これをもちこたえることができなくなるのではないか、そして、アジア主義等実体のないものだとさめつけ³⁾、おしよせる欧米思潮の波に同化されてしまうのではないか、というような見解である。

(2) 欧米の個人主義文化

欧米は、その基層文化が狩猟文化であるから、個人主義的であるとされている。この場合、個人主義というのは自分独りのみの利益快楽に拘わる利己心主義と異なり、自己の尊厳を主張するよい面と解すべきであろう。なお、個人主義が成熟段階に達すれば、自己の尊厳を主張すると同時に、他人の尊厳をも認めなければならないと考えるようになり、ここに約束を守る意識が強くなる。これはひいて法律を遵守する精神に結びつき、そして法治主義的精神につながる。

個人の自由を尊ぶ思想が経済にあらわれるとき、それは当然資本主義となる。最近この資本主義は、「米英型資本主義」と「ライン型資本主義」という対立する二つのタイプに分かれるとみなされている。前者は、より自由に市場を開放して合理性と利益を追求し、社会福祉への考慮等は排斥しようとするものである。後者は、ドイツで最も発達したためにライン型といわれているが、企業利益の社会的還元・社会的責任・社会的福祉制度を重んずるものである。ところが、今日、後者は前者の攻撃にさらされているとされている⁴⁾。

(3) 韓国の集団主義文化

韓国は、利己心が強く個人主義であるとみなされたり、または、日本と欧米の中間に位置するものと考えられたりした。しかし、筆者は、韓国も日本と同じく農耕文化を基層文化とするものである為、それは、決して個人主義である筈はなく、集団主義に属すると主張している⁵⁾。

いわば、ルーツが同じだということである。それが為に、両者が非常に類似している。しかし、同じルーツといえども全く同じだというわけにはいかない。血は争えないといっても少しは相違するところがある。異なった地理的環境の下に永い年月の間、これが二つの流れに分岐する。比較といってもそれは、根を同じくする枝と枝との相互比較に過ぎない。

2. 問題の提起

以上が、この理論に関連する概要である。これらの概要をふまえて、筆者は、新たに次のような問題を提起したい。

その1、韓・日の集団主義は農耕を、欧米は狩猟を、夫々基層文化としているといっているが、それは考古学的に人類学的に果たして根拠があるのだろうか。アジア・欧米をとわず、全人類の原初における生活の糧をうる生業は、狩猟・漁撈・植物採集等ではなかつただろうか。それならば、韓・日ともにその原初の基層文化は狩猟・採集文化であつた筈である。

その2、欧米といえども、いつまでも狩猟・採集が続いていたわけではない。生業としての狩猟時代が過ぎれば、当然一応食糧生産時代に入らざるをえず、そうなれば先ず農耕が始まつた筈では

なかろうか。

その3、農耕文化は集団主義、狩猟文化は個人主義につながるものと、既定事実の如くいわれているが、それには果たしてどういう根拠があるのであろうか。その構造的本質の詳細な究明がもっと必要ではなかろうか。

その4、韓・日と欧米との間に著しい差異があるとすれば、それは韓・日の稲作農耕に由来するのではなかろうか。それでは、稲作の起源はどこにあり、稲作についての韓・日間の連携関係はどうであったか。

その5、人類が、環境によりその形質に変化を来すものとすれば、例えば、古生人類より現世人類へ、狩猟民族より農耕民族へのように、その形質に相違を示すのは生理学的に遺伝学的にどういう根拠があるのか。

その6、人類の行動構造が、産業環境により形成されたのであれば、将来この産業環境が変化したとき、人類の行動構造は、またどのように変化していくのであろうか。今日、韓・日ともにめまぐるしい経営環境の変化に伴い、リストラ・リエンジニアリング等従来の経営行動に対し、きびしく再検討が迫られているのが現状である。こういう現状に対し、どういう対応が求められるのか。

これらの問題につき、もっとも原初的な過去に遡りその原点を見極めたい。そのことにより、もっとも先端的な未来への究明に接近することができるであろう。

II 人類の発祥と稲作の起源

1. 地球の年代

地球が形成されたのは45億年前であるといわれている。そして、形成されてより5億年前までを原生代、それより2億年前までを古生代、なお、それより7千万年前までを中生代、その後1万年前までを新生代という。新生代は、さらに第3紀・第4紀に分ち、第3紀はなお細分して古い方から始新世・漸新世・中新世・鮮新世と名づける。第4紀は、洪積世・沖積世に二分し、沖積世は1万年前から始まる。洪積世は各々百万年に亘る前後二期に分かれ、後期は氷河時代となる。洪積世を最新世といい、沖積世を完新世（現世）という。

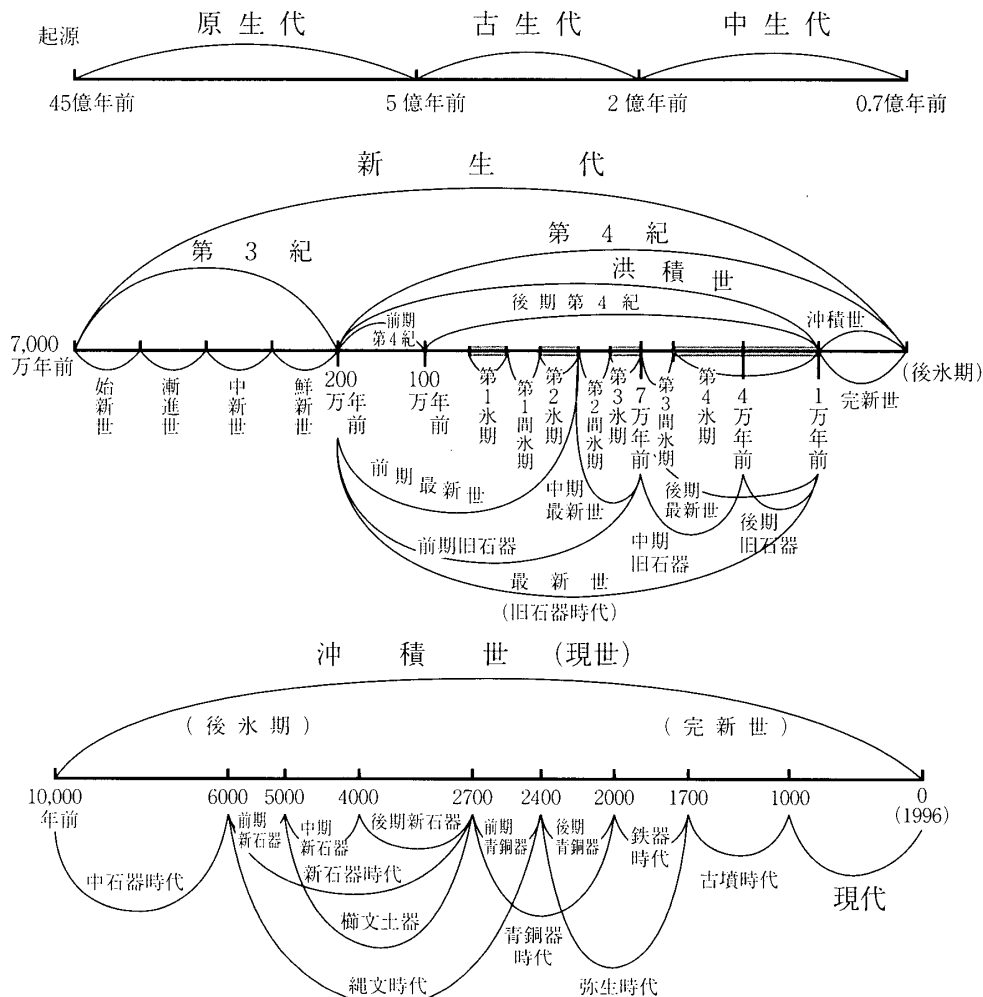
洪積世は、旧石器時代である。氷河時代は4回の氷期があり、氷期と氷期の間に3回の間氷期があった。現世は第4回目の間氷期かも知れない。最新世は、第2氷期までを前期最新世、第3氷期までを中期最新世、第4氷期までを後期最新世という。旧石器時代は、第3氷期までを前期旧石器時代、第3間氷期から第4氷期中頃までを中期旧石器時代（7万年前～4万年前）、第4氷期中頃から旧石器時代末までを後期旧石器時代（4万年前～1万年前）という。

第4氷期のWürm氷河がしだいにとけ始め（1万年前）北方に後退し、後氷期となり氷河がとけて水となり海面が高くなった。かくして完新世となり現世を迎える。海面が高くなるや陸続きであったイギリス・日本列島・ジャワ・スマトラ等が島となった。完新世に入り6,000年前までを中石器時代といい、その後より新石器時代に入る。新石器時代は5,000年前までを前期新石器時代、4,000年

前までを中期新石器時代、2,700年前までを後期新石器時代という。そして、それ以後青銅器時代に入り、2,000年前まで続く。これらの年代には、地域により差異がある。以上は一応韓国を基準とした。ヨーロッパは4,000年前頃、シベリア一帯は3,500年前頃より青銅器時代に入った等といわれている。また、石器時代と青銅器時代の境界前後には、金石併用期があった。なお、青銅器時代を前期（400年）後期（300年）に分かつ。青銅器時代がおわり鉄器時代となり、1,700年前まで続く。その後約700年間古墳時代となり現代に至る。

韓国では、中・後期新石器時代を櫛文土器時代ともいう。日本では、前期新石器時代より前期青銅器時代までを縄文時代、そのあと鉄器時代までを彌生時代という⁶⁾。

これらの時代の推移を図示すれば、次の（図1）のようになる。



（線の長さは、年月の長さを示してはいない。）

図1 地球の年代

2. 新生代の人類

生命が、地球に生まれたのは35億年前⁷⁾とも、20億年前⁸⁾ともいわれている。

人類学では、第3紀霊長類として、擬猴類・猿猴類・類人猿をあげ、ついで古生人類として、猿人・原人・旧人をあげ、なお化石現生人類として新人をあげている。しかし、第3紀霊長類と古生人類との中間形態は明らかにされていない。

猿人は、第4紀初頭にあらわれた。脳容量は400～700ccに達し、直立歩行したことは疑いないとされている。小さい脳であるが、礫石器という下等ながら明らかに一定の伝統に従って作られた道具が、用いられていた。

原人は、中期最新世、前期旧石器時代晩期にあらわれている。北京原人 (*Sinanthropus pekinensis*) もこれに属する。脳の容量は850～1,300ccに達し、骨や鹿骨を道具として使用していた。

旧人は、中期旧石器時代にあらわれた。*Homo sapiens neandertalensis*とよばれる。脳の容量は1,300～1,600ccに達する。木の槍、石の穂先のついた槍等を使った。これは道具を使った始まりであろう。また落穴等を使って大動物の狩猟を盛んに行った。住居であった洞窟の近くに、意識的に穴を掘り、死体を安置し食物や日用品を供えて手厚く葬っている跡も発見されている。

新人は、後期旧石器時代にあらわれた。*Homo sapiens*とよばれる。脳の容量は1,300～1,600ccで旧人と変わらず、現生人類ともほぼ等しい。知力の発達した新人たちは、石刃・石核・削器・錐等、相当進歩した道具を用いて狩猟を行った。落穴、崖からの追い落とし等の遺跡は、集団の作業があったことを推測せしめる。彫刻や絵画等芸術的にきわめてすぐれた作品も残している。残した岩絵には、鹿・野豚等の狩り、人間同志の戦いをあらわしたものもある。埋葬は一層念入りになり、生前使用していた道具・装身具・食物等が副葬された。死後の世界に多くの配慮を捧げたものとおもわれる⁹⁾。

3. 食料生産革命と稲作の起源

(1) 後氷期気候変化の影響

洪積世の第4氷河がしだいにとけ温暖化し後氷期に入るや、地表の海洋状況に変化がおきたが、同時に生物界にも影響をもたらした。氷河・ツンドラ地帯が北方に移動し、草原・森林地帯に変わっていった。寒系動物は多く絶滅し、森林を居住地とする鹿・猪・狐などがあらわれた。

(2) ヨーロッパにおける人類の適応

自然環境の変化に対し、人類は新しい適応を示した。しかし、新しい適応といっても、技術的には進歩を示したものの、ヨーロッパにおけるその文化はやはり狩猟・採集の経済に基盤をおくものであった。洞穴や岩陰等を住居とした。同時に野外にも住んでいる。この時代の特色は次のようである。

- 1) 弓矢の普及……後期旧石器時代にわずかに用いられてきた弓矢が盛んに用いられるようになった。弓矢は、小形で脚の速い動物を狩りする恰好の武器であった。細石器も多く用いられた。

2) 犬の家畜化……犬を家畜とし狩りに役立たせることに成功した。

3) 海産物の利用……後期旧石器時代にも行われていたが、中石器時代人は盛んに海へ進出した。網・鉤・槍・釣針・舟等を利用している。重要な食糧源であった大形動物を失ったので海産物の利用は重要であったであろう。

(3) 食料生産革命

ヨーロッパに新しい適応が行われていた頃、西アジアの一部では、自らの手で食料を生産する農耕・牧畜が行われていた。9,000年前には、定住農耕村落が成立している。

人類の発祥については、200万年前説¹⁰⁾と100万年前説¹¹⁾がある。後者によるとしても100万年前ということになり、このうち99%が狩猟・採集時代であり、農耕・牧畜時代は僅か1%に過ぎない。

気候も温暖化し人知も進み、ここに人間と動植物の共存関係が始まった。それまで主として狩猟に従事していた男性は動物の習性をよく研究し、動物を飼いならすようになった。また、植物性食料の採集に従事していた女性も、植物特に穀類を選択して採集し、種子をまいて翌年それを収穫するようになった。この共存関係が農耕・牧畜の起源となる¹²⁾。

(4) 農耕・牧畜の波及

西アジアの一角に、食料生産革命がおこり農耕・牧畜が始められたが、その一角とは地中海の東海岸よりシリア・イラクをへてイラン高原の一部に至る「三日月地帯」である。ここに、食料の生産が発明され定住農耕村落が成立し、それは漸次都市文明へと発展した。そして、それはまた四方へ波及していった。波及の地帯によっては、農村からはなれて牧畜を主な生業とし、草を追って一定の地域を遊牧する遊牧民も生まれた。

村落文化が、各地に波及する経路を辿ってみよう。次のような三つの経路があった。

1) 西方への波及には、なお次の三つの道があった。

- ① コーカサスをへて、ウクライナ、ドイツに至る。
- ② バルカン半島・ドナウ河をへて、中央ヨーロッパに至る。
- ③ バルカン半島・ギリシャをへて、イタリア・スペイン・フランス・イギリスに至る。

2) ナイル河方面に入り、北アフリカに至る。

3) 東方への波及には、次の二つの道があった。

- ① イラン高原からインダス河流域に至る。
- ② 中央アジアのオアシスに沿い、甘粛・青海をへて山西・河南の黄河流域に至る。

これらの流域には、何れも7,000年前頃から5,000年前頃までのこれらに関する遺跡が発見されている。農耕は、小麦・黍・大麦・果樹・豆・亜麻・粟等の作物であった。ところが、ひとり河南の黄河地域の農耕作物の中に、ほかのいろいろな作物とともに、米があらわれている。牧畜としては、牛・山羊・豚・羊・犬等を飼っていた¹³⁾。

狩猟・採集時代をへて食料生産の農耕・牧畜時代に入ったとはいえ、狩猟・採集が補助手段として相当期間続いていたことは当然である。

狩猟・採集時代をへて一応農耕・牧畜時代へ入ったというのは、ヨーロッパもアジアも変わると

ころはない。しかし、今までの検討により、これらに関するアジアとヨーロッパの差異について、かすかに認められるものとしてあげられるものがある。それはアジアには米があったのに対し、ヨーロッパには米がなかったということである。そこで、次に項をあらためて稲作の起源について検討することにしよう。

（５）稲作の起源と伝播

１）起源

イラク・イランの「三日月地帯」より、農耕・牧畜の技術がおこり多くの経路をへて広く地球上にひろがった。そして、これらの地域で耕作・飼育された作物・家畜の種類がいろいろとたくさんあげられているが、稲があげられているのは既にふれたように唯一黄河地域だけである。これは、この地域がほかの地域から一般食料革命の技術は受け入れたけれども、稲の種子を受け入れてはいないことを示す。それでは、稲の起源は当然別途に求めなければならない。そこで、もう少し詳しく稲の起源を検討してみよう。

揚子江河口近くの遺跡地よりは10,000年前の炭化稲粳が出土されており、黄河流域では6,000年前の炭化米等があらわれている。ここで、中国の稲栽培は10,000年以前より始まっていたと推定されている¹⁴⁾。揚子江中流域においては、5,000年前より水田稲作が行われていた。4,000年前より水稻栽培面積は一層ひろがり、2,600年前には灌漑事業が行われた。2,400年前には、黄河流域で大規模な灌漑工事が行われていた。米が漸次主食化した。華北では、灌漑排水施設と耕地区画の技術が発達し、揚子江流域の水稻にも影響を与えていた¹⁵⁾。

２）伝播

雲南（中国南西部）を中心として、東は揚子江流域、南はメコン江流域に及ぶ地帯を、「東亜三日月地帯」といい、稲作がここより始まったとみられている。稲には、ジャポニカ (Japonica)、インディカ (Indica)、ジャバニカ (Javanica)、の種類があった。ジャポニカは、中国東北部をへてここより二つに分かれ一部は日本の北部へ一部は韓国の北部へ伝わった。ジャポニカは、また、黄海をこえて韓国南部に及びこれはさらに日本の中部に至った。ジャポニカは、なお、対馬をへて日本の九州に至り日本列島を北上している。インディカは、タイ・マレージャ・ボルネオをへて、フィリッピンに、また、南シナ海をへて同じくフィリッピンに及んでいる。インディカは、なお、アフリカにも進んだ。ジャバニカはスマトラ・ジャバからフィリッピンをへて九州に達している¹⁶⁾。

これらを地図にあらわせば次の（図２）のようになる。

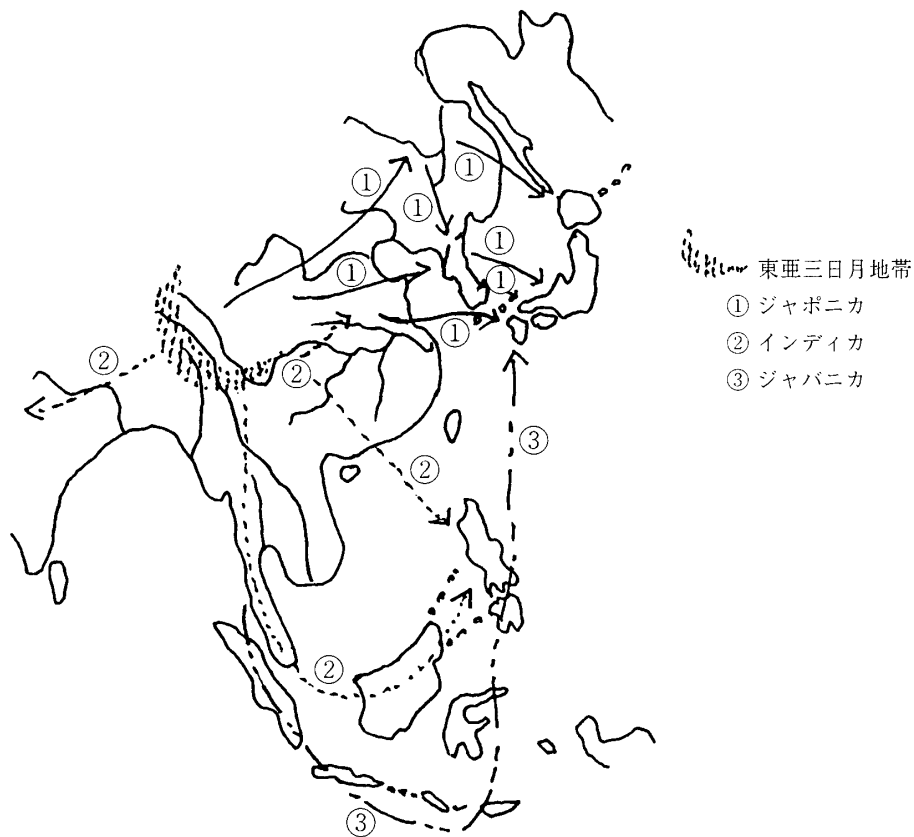


図2 稲の伝播

このような経路を見ると、韓・日はともにジャポニカがその主流であったことが分かる。しかし時に、伝来したジャバニカの影響も大きいものがあったとおもわれる。それは、ジャバ東部のチモール島では稲のことをAneといているのだが、日本ではIneといい、韓国南部でNarakともいっているのによって、推測することができる¹⁷⁾。これは、Ane, Ine, Narakは、何れもNを素音とする同じ用語だとみられるからである。

韓半島における稲栽培の起源は、古代炭化米等の出土により、紀元前数世紀とおもわれていたものが段々と遡り、今では一般に櫛文時代（大体縄文時代）の中期（3,000年前頃）とみられている¹⁸⁾。日本における起源は、縄文晩期（2,500年前頃）説が最も有力である¹⁹⁾。

Ⅲ 人種と民族の生成、並びに「人類」としての意識

1. 人種

（1）人種の本質

人種とは何であろうか。「言語・風俗・国籍の如何をとわず、共通の遺伝的な身性の諸特徴を示すところの人の自然群」と定義し、民族と人種は峻別すべきであるとする。両者が一致するのは、エスキモーのような特別な場合であり、人種とはあくまでも遺伝的な集団である。

皮膚の色はもっとも目につきやすい人種形質の特徴である。この色は、環境に適応する為に形成されたものである。黒色は紫外線の影響をさける為に熱帯で有利であるし、白人の明色は日光の透過をよくして、体内でビタミンDのもとになる物質の形成を容易にする。

一度形成された人種といえども、永久に一定不変であることはできない。何千、何万年の間には遺伝子構成の上に大きな変更をうける。突然変異・遺伝的浮動などがその原因である。

(2) 世界の人種

現在地球上における人種を、大きく次の三つにわけることができる。

1) 白色人種群

明色の皮膚、高い鼻、波状または毬状毛等が主な特徴である。これは、また、次のように細分される。

- ① 古層白色人種……アイヌ、オーストラリア、トラヴィータ（中央南インドの一部）、ヴェッダ（セイロン）等が、これに属する。多毛、小さい脳容量などがその主な特色である。
- ② 第1次白色人種……アルプス、アルメノイド（アルメニアと東南ヨーロッパ）、地中海沿岸、北ヨーロッパ人種がこれに属する。その起源が、地中海人種の色素離脱の突然変異によるものなのか、南都ロシアの古人類にその祖先があるのか、問題が残されている。
- ③ 第2次白色人種……ディナール（アルプス東部）、東バルチック（フィンランド・北ロシア・バルト海諸国・北ドイツ）、トラン（南ロシア・トルキスタン）、ポリネシア人等がこれに属する。この中、北バルチック人はアルプス人・地中海人と蒙古人種的な特徴が混在し東方人種ともよばれる。

2) 蒙古人種群

黄色人種ともよばれる。直毛で体毛が少ないのが主な特色である。次のように細分される。

- ① アジア蒙古人種……なお、北・中・南アジア蒙古人種に分ける。韓・日は中央蒙古に属するであろう。
- ② インドネシア＝マライ人種……南シナからインドにかけて、また、インドネシア諸島に分布する。蒙古人種としての特徴は周辺の遠い島々に行くほど薄れてくる。
- ③ アメリカ・インディアン……アジアから数度の波をなして、アメリカ新大陸に渡っていた。

3) 黒色人種群

その名の如く皮膚の濃色がめだつ。暑い地域への適応力が強く、汗腺の活動は盛んで、体毛が少ない。次のように細分される。

- ① 第一次黒色人種……森林黒人（コンゴ盆地帯・南アフリカ）、ネグリト（コンゴ盆地・アンダマン諸島・インドネシア各地・ニューギニア奥地）がこれに属する。かつては相当広い分布をもっていたが、今はそれほど広くない。
- ② 派生黒色人種……カラハリ砂漠人・ナイロティック黒人（ナイル・ガザル付近）、大洋州黒人（メラネシア）、ブッシュマンと hottentott がある。hottentott は皮膚の色

が黄褐色で蒙古人種との混血が行われたであろうといわれている²⁰⁾。

2. 民族

(1) 民族の本質と言語

民族とは、ある人間の集団が一定の地域に永い間、共同の生活を営むことによって、風俗習慣をはじめ多くの文化内容を共有し、同じ歴史と運命とに生きたところから「われわれ」という共通の同類意識に結ばれたものであると、定義されている。ところが、ここで文化内容を共有するといっているが、この決定的文化要因の特定は容易ではない。

しかし、言語の共通ということは民族を民族として結合する上に基本的な役割を果たしている。同じ言葉を話す人々が二つ以上の民族に分かれることはあっても、一つの民族は常に同系統の言葉を用いている。この共通の言語によって、人々は互いに意思を伝えあうのみならず、伝統を社会的に固定し、同じような形式で思考する。さらに、社会や文化の構造に根本的な変化が生じて、一つの言語の基礎的な単語や文法の構造はなかなか変わらない²¹⁾。

基礎的な言語や文法の構造がなかなか変わらないのは、韓・日の間にもみられる。日本の大和言葉に、「おも」がある。これは、「母、慈母」の意である²²⁾。「母」の韓国固有語は「엄마」又は「어머니」である。「おも」の発音は、Omoと表記でき、「엄마, 어머니」は「Omma, Omuni」と表記できる。こうしてみると、この素音は全く同じOmで、語根は一つであることが分かる。母は、人々にとってもっとも重要な存在であろう。この母という語根が同じだということには、特に深い意義があるとおもわれる。このようなほかの例並びに文法構造の一致等については、筆者は既に発表したこともあるので、ここではこれに止める²³⁾。

言語は、決して意思疎通の道具にすぎないものではない。言語は感情によって表現され、また、言語によって感情が形成される。言語は正に民族の感情そのものである。多くの民族が、たとえ大きな社会革命を中にはさんでも、それぞれの個性つまり民族性をもった運命共同体として、永い間存続するという歴史の事実も言語のもつこうした特質に由来するものである²⁴⁾。言語は、言語が含む以上の意味をもって迫ることすらある。これがお互いに相通ずるとき、ほんとうに「われわれ」という同類の意識が生まれることとなる。

しかし、言語が同じであれば、そのほかの文化の特性もすべて同じくあらわれるというものではない。まるで系統の違った言語を話す民族同志が相結び同じ経済生活を営み、同一の宗教を信仰する例もあれば、同じ言語を用いていても、時代により、また地域によりまったく異質的文化をもつ相異なる民族もある²⁵⁾。けれども、同じ言語をもってお互いの感情を通じあうことは、民族の基本であり、異なる民族といえども同系統の言語をもつことは、もっとも親近を保ちうる条件であろう。一応異なる言語であっても、その語根を共通にすることが多いということも、この条件に接近するものといわざるをえない。

世界の言語は、(1) シナ・チベット語族、(2) 南亜語族、(3) 南島語族、(4) アルタイ語族、(5) ウラル語族、(6) セム・ハム語族、(7) インド・ヨーロッパ語族等に分けられる。韓国語と

日本語は、アルタイ語族に属するものとされている²⁶⁾。

(2) 世界の民族

世界の民族を、西暦1,500年頃（新大陸発見当時）を基準として、その基本的な生活の資を得る方法、つまり生業の種類により分類すれば、大体次のようになる。

1) 食料採集民族

狩猟・漁撈・採集によって野性の動植物を生活の資にあてる民族である。ブラジル熱帯林の原住民、北氷洋岸のエスキモー、新大陸北西インディアン等である。地球上ごく一部に残っているがこれにより先史時代の生活様相を推定することができる。なお、次の二つに大別する。

- ① 遊動的採集・狩猟民……熱帯の密林や大陸の縁辺部に小さな単位集団を形成し、特定の地域内を転々と居所をかえながら、動植物の狩猟・採集によって生活する部族である。貧弱な技術の下に食料資源を確保する為に、少数の人間が広い地域で生活しなければならず、社会は孤立した大家族の程度にとどまる。大規模な共同労働を不可能にしている。しかし、家族的結合は固く親子夫婦の愛情もこまやかで、一般的な道德意識は発達している²⁷⁾。
- ② 定住的採集・狩猟民……特定動物または資源に恵まれた環境に適応した結果、かなりの集団が定住もしくは半定住した。これには、定住的狩猟民・定住的漁撈民・定住的採集民があった。

2) 食料生産民族

植物の栽培と動物の家畜化により、狩猟・採集民より一段と安定した経済の発展を示した。次のように分類することができる。

- ① 農耕民族……これには、根莖栽培民・穀物栽培民があった。穀物栽培には、なお次の二つの種類があった。
 - ・ 菜園農耕民：集約的な施肥と灌漑により零細に分割された耕地を利用して多毛作農法を行う。中国・韓国・日本がこれにあたる。
 - ・ 田野農耕民：菜園よりも広大な農地を耕作し、大動物の家畜を利用する。輪転式粗放農法である。西アジア・ヨーロッパ・北アフリカにおいて、主としてこの農法をとった。
- ② 遊牧民族……生活資料の大部分を牧畜に依存する。人間の単位集団が家畜の群とともに、一定の牧草地帯を季節に応じて移動する。モンゴル系等がこれにあたる。人口の集中を許さず男子を中心とする大家族の単位集団が比較的にはなれあって生活した。車や騎馬の技術が発達し、すぐれた機動力と軍事力を発揮した。しばしば、豊かな農耕地帯に侵略を試み、定住農耕民の上層に征服国家をうちたてたこともあった²⁸⁾。

(3) 韓・日とヨーロッパの民族考

いままでの検討により、韓・日が農耕文化であり、ヨーロッパ（欧米）が狩猟文化であると、単純にいいきことはできないことが明らかになった。人類が、地球上にあらわれて少なくとも100万

年がすぎた²⁹⁾。そのうち99%にあたる99万年は、すべての人類が狩猟・採集民であった。農耕・牧畜をはじめたのは、のこりの1%にあたる10,000年前頃からのことである。このとき「三日月地帯」に農耕・牧畜がおこりこれはその後9,000年前頃からヨーロッパにも東アジアにも同様に波及した。このことは韓・日もヨーロッパもともに、狩猟・採集文化を基盤として、その上に農耕・牧畜文化を、ややうわ乗せしていることにすぎないことを示している。韓・日とヨーロッパの相違は、ただ、韓・日には稲作農耕が行き渡っていたのに対し、ヨーロッパにはそれがなかったことが指摘できるにすぎない。ところが、韓・日におけるその稲作農耕も始められたのは、2,500年前ないし3,000年前頃からのことである。

韓・日は、人類的にみて黄色人種であり、従って蒙古人種であることには疑いない。それは、言語がともにアルタイ語族に属していることをみても明らかだ。ところが、蒙古系の民族は遊牧民族であった。しかし、広大な草原地帯においては遊牧民であったけれども、それが韓・日に及んだとき、その地理的条件により、農耕ないし稲作に転換同化せざるをえなかったであろうことは、容易に推察できる。

これらの検討により、韓・日とヨーロッパの両者を対比することとなれば、韓・日は稲作民族であり、ヨーロッパは狩猟民族であるといわねばならないこととなる。

(4) 「われわれ人類」としての共同意識

民族は「われわれ」という共通の同類意識により結ばれたものであった。そして地球上には多くの民族が形成された。しかし、もう少しつきつめるとその民族と民族の間に、いわゆる人間性のもとより如何により多くの共通普遍な特質が存在するかという事実におもひ至る。もっとも重要であった筈の生業において、永い人類の年代を100万年とみても、共通的な狩猟・採集時代が99%をこゆるものであった。食料生産の方法が異なる時代に至ったけれども、それは僅か1%未満にすぎない。殊に文明の発達による地球自体の相対的縮小、自然環境に対する危機感等は、共同運命体としての「われわれ人類」に昇華した意識の成熟を促してやまない。

IV 遺伝と脳の機能

1. 遺伝子の構造

世代から世代に伝わる遺伝の基本要素を、遺伝子 (gene) という。遺伝子は、DNAという分子の中に存在する。DNAは蛋白質よりなる基質と結合して核蛋白となり、細胞の核の中に染色体を構成する。従って、遺伝子の行動と染色体の行動は一致する。人類の体細胞の染色体数は46である。

そうして、遺伝子は蛋白質合成の為の暗号よりなる情報をもっている。DNAは、自己増殖能力をもっている安定した分子であるけれども、ときにDNAの一部が偶発的な変動をおこすことがある。このような変動は、暗号よりなる指令を変化せしめ、蛋白質合成が停止され、もしくは欠陥をもつ蛋白質となることがある。これが突然変異である³⁰⁾。

突然変異の総体的結果は、その個体の体形と特性をあらわす³¹⁾。一つの個体が一定の環境の下に

永い間生活すれば、そこに遺伝的多様性があらわれ、それは耐性をなし、これが遺伝子型を形成する。そして、その個体の体形と特性が同様な次世代を生産する³²⁾。この遺伝子型は相当に安定している。しかし、固定しているのではない。

個体の体形と特性を形成するこの遺伝子は身体の全身に行きわたり、その部分部分が夫々個体の個性をもっている。一人の人の尊い本質がその人の部分部分に組み込まれているという。臓器移植のとき拒絶反応をおこすのはその為ではないか、といわれている³³⁾。

これにはまったく異論はない。しかし、その一人一人の意識・特性、その集団の特性、国民性(national traits)をみきわめる為には、やはり意識・感情等を司る神経細胞がもっとも集中的に組織されている脳の機構と機能を検討せざるをえない。そこで、次の項において、この脳の問題にふれようとおもう。

2. 脳の組織と機能

(1) 組織

人間の脳は、宇宙においてもっとも複雑な構造物である。人間の脳は1,000億個に達するneuron(神経源)より成りたっている。

neuronはその一つ一つが独立している細胞である。いわば神経細胞である。細胞であるから内部にnucleus(核)をもちその中に遺伝子を具え遺伝情報をもっているのは、一般の筋肉細胞と同様である。

ただ、細胞膜の変形とおもわれるaxon(軸索突起)、dendrite(樹枝状突起)をもっているのが異なる。これらは、遺伝情報を細胞から細胞へ伝達する役目をもっている。

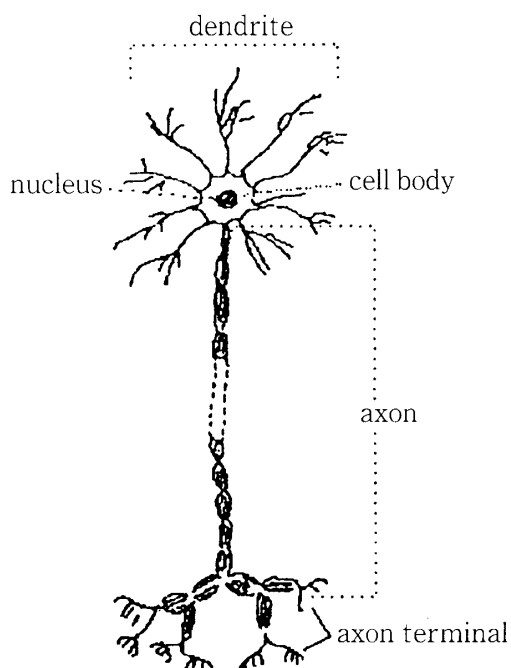


図3 neuronの構造

axonのterminal(終末)が情報を送出し、ほかのneuronのdendriteがこれを受容する。このような連結部をsynapseという。axon terminalとほかのneuronのdendriteの間にはcleft(透き間)がある。このneuronとsynapseの構造を次に(図3)と(図4)に示そう。

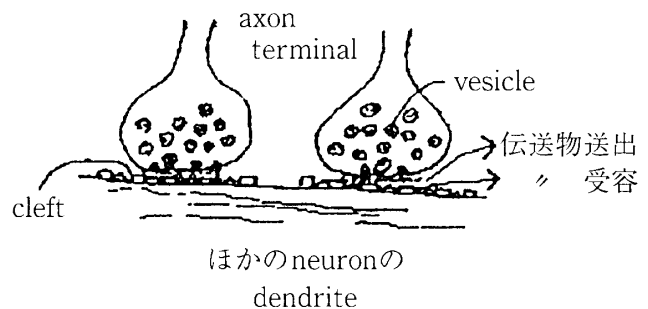


図4 synapseの構造

脊椎動物は、cleftの幅が平均200Å³⁴⁾といわれている。axon terminalの頂点は少しふくらみその中にはsynaptic vesicle（小囊）がある。このvesicleには、相手となるneuronの活動を促進する興奮的なものと、抑制的なものと、興奮的にもなれば抑制的にもなる三つの種類がある。

脳には、前脳・中脳・後脳・延髄・小脳等その他がある。前脳には大脳半球がある。大脳半球の外側の層を新皮質（neocortex）という。この大脳新皮質には、500億個のneuronと500兆個のsynapseがあると推定されている³⁵⁾。

（２）機能

人間が人間としての意識の秘密をひめているのは、大脳皮質の機能によるものである³⁶⁾。大脳半球は、右半球と左半球に分かれる。右半球は、左指を動かし、音楽・絵画・舞踏・彫刻等を理解し、知覚を司る。左半球は、右指を動かし、数学・言語・科学・論理・著述等の機能をもつ。健全な脳の左・右半球は常に緊密に連繋する。膨大な量のneuronとsynapseがこれまた天文学的数といえるさまざまな連結の態様により、ありとあらゆる奥妙な働きを現出するのである。人間のもついわゆる精神活動なるものも、遺伝子を包蔵する核を中心にもつneuronという細胞の作用によって、注意・知覚・心象・記憶・思考・問題解決等の機能が発揮されたものといえよう³⁷⁾。

（３）環境と脳の発達

Mark R. Rosenzweigが中心となり、多くの生化学者と解剖学者と共に、鼠による実験を行った。生後25日から80日間三つの相異なる条件下に飼育した。第1の条件は10～12匹を同居せしめ毎日新奇な珍しいものを取り換え与え（enrichment condition；EC）、第2の条件は、珍しいものなしに3～4匹を同居せしめ（standard condition；SC）、第3の条件は、珍しいものも与えず1匹だけ（impoverished condition；IC）にして飼育した。その結果、ECがIC・SCよりも脳の重量が重く、迷路を解決する能力が高く、神経伝達の為の生化学的変化が増加した。これは、環境の刺激が脳を発達せしめることを示すものである³⁸⁾。

こういう主張がある反面、K. Breland & M. Brelandの夫妻学者は、やはり多くの動物実験の結果であるとして、本能的行動が条件化された行動よりも優勢であると主張している。学習を強化して条件化された行動があっても、それに対応する強い本能的行動があれば、条件化行動は弱化され、または停止する。すなわち、条件化行動は本能的行動に向かって漂流するという。これを本能漂流（instinctual drift）といっている。本能という用語は、心理学において一時使われないようになっていたが、最近新たに使われるようになった³⁹⁾。

この理論は、また次の行動主義と形態主義の理論とも関係がある。

行動主義理論は、脳とは感覚をそのまま受け入れる受容器であり、複雑な配電板として反応をおこすものだと考える。そして、人間性とは我々が経験することにより決定されるのだとみる。従って、「心」とは外顯的「行動」による経験がその要素であると主張する。そして分析的・客觀的となる。ところが、形態主義理論では、脳に、より一層積極的役割を与える。脳は環境より入ってくる情報をただ単に貯蔵しておくだけでなく、これをより一層組織的に有意義に構造化する。学習された機能体でなく、脳が構造化するのである。かくして幾何学的図形にすぎないものに対しても意義

ある一つの「形態」として認識する。そして、全体的・主観的となる。このような脳の組織とその能力は遺伝的に決定されていると主張する。そして、知覚に及ぼす遺伝的影響の重要性を強調する。

ところが、条件化行動が強力に条件化されておれば、本能的行動よりも優先することとおもわれる。しかし、それがそれ程強力でなければ本能的行動に対して漂流することとなる。一般的に、形態主義論者が遺伝的影響・本能等を重視しても、環境よりうける経験・条件化の重要性を決して無視してはいない⁴⁰⁾。

V 民族の生業と行動構造

1. 検討の単純化

人類の起源において欧米の狩猟民族，韓・日の農耕民族というように対比させていた考えに対する，検討作業を効率的に進行させる為に，一応概念の単純化を図りたい。狩猟民族といえども正確には狩猟・採集民族であるが，主たる生業が狩猟であった為，狩猟民族とする。その狩猟行動にも個人的行動と集団的行動とがあったであろう。しかし，個人的行動が主であった筈だから，個人的行動を前提とする。

狩猟・採集時代が過ぎ，農耕・牧畜時代を迎えたとしても，前時代の狩猟・採集が全然消え去ったとは考えられない。一時いくらか残っていたであろう。しかし，例外的・一時的・小部分的要素は一切捨象し主だった農耕をとることとする。また，農耕といえども田作農耕は，ヨーロッパにも盛んにおこなわれていたので，これでは韓・日との比較の対象にならない。そこで比較するにはヨーロッパではあまり行われなかった稲作をとらざるを得ない。すなわち，ヨーロッパと韓・日両者ともにあった農耕は捨象し，一応ヨーロッパは狩猟，韓・日は稲作として比較することとなる。

また，欧米といっているけれども，この「米」のアメリカは新大陸後を意味し，それはヨーロッパと共通するところが多いとおもわれるのでヨーロッパに焦点をあわせることにしたい。

2. 狩猟民族の行動

ある狩人が森へ出て獲物を探すことになった。森の中を長い間歩き回った後，やっと，熊を一匹見つけた。狩人は，注意深くかつ敏速に一步一步熊に近づいて行かねばならない。獲物が射程距離に入ったとき矢をつがえ狙いを定め，遂に矢を放つ。矢は熊をいとめた。しかし，急所を僅かにそれている。熊は森の奥へ逃げこもうとしている。狩人は短剣を握り熊の後を追ひ，熊にとびかかる。

このような狩人の行動を決定する重要な要素は，彼の瞬発力である。獲物があらわれたとき，獲物と自分との力を比べてこれを追うか追わないかを瞬間的にしかも正しく判断しなければならない。ときによっては逆襲されて自分の命をおとすかも知れない。

また，狩猟生活は不安定である。獲物がとれる日もあればとれない日もある。その日暮らしである。肉を貯蔵するとしても長くは出来ないだろう。今日他人に肉を分けてもらうことがあっても，明日は他人に肉を分けて与えることになることもあるであろう。そこで，上下身分関係が生ずる余

地はあまりない。

そして、狩猟生活には移動性がある。狩人は猟場から猟場へと、よりよい獲物を求めて転々とする。自己の能力が十分に発揮できる猟場を求めて移動するのは当然である。

これらを総合してみると、それは多分に個人主義である。瞬間的に判断するときも、自分単独で判断しなければならず、このとき自分の能力の如何が重要な基準となるであろう。狩猟民族は個人の発想および技術の如何が獲物の成果を決定するのである⁴¹⁾。

3. 稲作民族の行動

人類が永い狩猟・採集時代から食料生産時代にはじめて入ったのは、約10,000年前、いわゆる「三日月地帯」においてであった。それより約1,000年の月日が流れ9,000年前頃からは広く波及することとなり、ヨーロッパにもアジア東部にも農耕・牧畜がおこった。

ヨーロッパと韓・日の生業の相違は、約3,000年前から韓・日には稲作がおこっていたが、ヨーロッパにはこれがなかったことに求められる。そこで、稲作民族の行動をここで検討することにする。

人々が原野にたどりつき、そこに種をまいて作物を栽培し収穫することを考えるとき、人々はまず原野の開墾に着手するであろう。たとえ小さな土地であっても、原野を切り開くには一個人の力では到底不可能である。時間的にいってあまりにも効率が悪い。そこで人々は一致協力して開墾に従事する。開墾の仕事には、個人の自由は許されない。全員が揃って、大きな木を倒さなければならない。これらの仕事には、強い個性はあまり必要とされない。あまり個性的であることは、むしろ全員の協調性を阻害し、仕事の能率を落とすであろう⁴²⁾。

さらに、この農地が稲作の為の水田であれば、灌漑が必要となり、井戸を掘ったり水路をつくったりしなければならない。大規模となれば貯水池も設けなければならないだろう。稲には、陸稲と水稲がある。陸稲よりも水稲が品質・収量等において優れていることは言をまたない。一般農作において協調性が要求されたが、稲作の為灌漑が要求され水利施設が必要となるや、この協調性は決定的なものとなった。そこで、集団的な生活を行うこととなり、個が集団に没入する。水利の整った水田をはなれて他に移転すること等は容易なことではなく定住性が強くなる。

VI 集団主義経営行動の本質と変異

1. 本質の再検討

韓・日は農耕を基層文化とする為集団主義となり、ヨーロッパは狩猟を基層文化とするため個人主義となった経営行動をとるといわれている。しかし、韓・日もヨーロッパも同じくその根源にある文化は狩猟ではなかったか。100万年に亘る狩猟時代をへて農耕時代に入ったのは1万年前からのことにすぎない。狩猟により個人主義が培われたとするならば、ヨーロッパも韓・日もともにその根源には個人主義があるのではなかろうか。100万年の永い間に亘り遺伝子に深く刻み込まれた個人主義がその1%位の間に全く変わりうるものであろうか。

韓・日の集団主義といっても、社会主義もしくは共産主義理念の下に唱えるような、生産手段に対し私有を認めずこれを社会的・集团的財産となし、各人からは能力に応じ労働を求め、各人には能力あるいは必要に応じ分配するというような、そういう集団主義でないことは明らかだ。多くの人々が協調し、組織の秩序を重んじ、和を尊び温情をもって集団を統制していくことを主旨とするのが、その集団主義の内容である。この理念においては、原則として生産手段の私有を認める。また、能力以上に分配することもあれば、必要に応じ分配されないことが多い。集団主義においては家族手当を支給するが、これは能力等を基準にはしない。人間の欲望は逡増するのに必要なに応じ分配することを現実的だと考えることは到底できない。

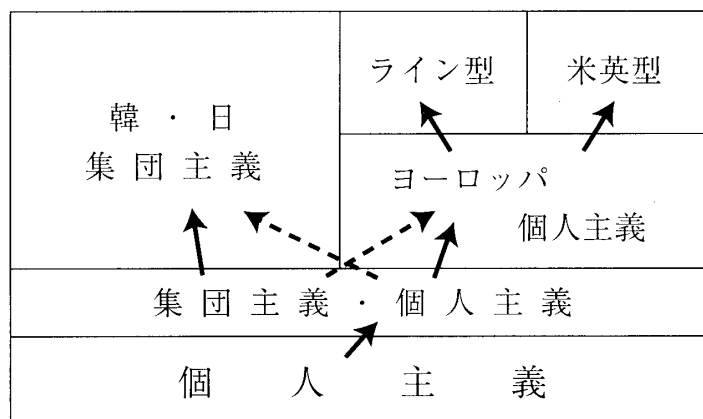
それでは、ヨーロッパの個人主義とはどういうことであろうか。利己心にみち、自己独り尊く他をかえりみないというような主義ではない筈だ。この理念が成熟すれば、自己が尊ければ他の自己も尊いということを認め、互いに尊重しあい約束を守り法に遵い秩序を守ることになる。最近、ここでいうヨーロッパの個人主義なるものも、二つのタイプに分かれる傾向を示すといわれている。一つは「米英型資本主義」でありもうひとつは「ライン型資本主義」であるという。

「米英型資本主義」は、最近15年ほどの間に米英の大学で唱導された理念で、次の二つの原則による。

- 1) 自由貿易が絶対的に善である。
- 2) 企業活動の唯一の基準は収益であるべきで、労働者や社会福祉への考慮は市場の合理性を歪めるもので排斥されねばならない⁴³⁾。

「ライン型資本主義」はドイツで最も発達をとげているのでこう呼ばれる。ドイツでは共同決定法・経営組織法等により、経営参加制が強く行われている。ドイツ型は日本型ともやや似ているので「日独型」ともいわれている⁴⁴⁾。これは、企業活動が収益ばかりを目的とするのではなく、労働者の利益や社会福祉制度との調和をめざすものであると考える。ところが、「米英型資本主義」はその主張に反して、いたる所で貧富の差を増大させ雇用を破壊しているのにも拘わらず、「ライン型資本主義」を脅かしているという⁴⁵⁾。

このような、集団主義と個人主義の関係を図示すれば、次の（図5）のようになる。



(- - - - - ➡ は潜在的行動を示す)

図5 集団主義と個人主義の本質的経営行動対比

永い狩猟時代に個人主義が深く刻みこまれた。その後、約8,000年に及ぶ農耕時代の間個人主義の流れと共に集団主義が形成されていったであろう。ところが、ヨーロッパには両者の中の個人主義が強く流れこんだ。そして、米英型の方向にその個人主義が一層強くあらわれ、潜在的に流れていた集団主義がライン型としてあらわれるようになった。一方、韓・日には稲作を契機として、決定的に両者の中の集団主義の様相を強く呈するようになった。しかし、潜在的に個人主義が流れているのを否めないであろう。100万年もの間遺伝的に構造化された脳による本能が9,000年ほどの条件で全く条件化してしまうとはおもわれない。

個人主義が成熟し、利己心にとらわれず他の自己をも尊重する精神に徹すれば、集団主義の協調し和を尊ぶ精神とあまりかわらないことになってしまう。殊に、ライン型が企業の利益と労働者の利益並びに社会福祉との調和を図るとすれば、これは韓・日の集団主義と一致するように考えられる。

個人主義によっても、集団主義によっても、同様に一応強い組織をつくることはできるであろう。けれどもそれは基本において異なるものがある。個人主義組織は、個を一つ一つ積みあげて組織をつくるというのに対して、集団主義組織は、先ず組織という全体があつて順次下方に分割されその末端が個であるという発想である⁴⁶⁾。個人主義が、「米英型資本主義」のような個人主義になれば、それはもう集団主義とは根本的に異なるものとなる。従ってやはりいわゆる集団主義と個人主義は峻別されるべきものであろう。

なお、韓・日のいわゆる集団主義の本質はその成立過程をみるとき、個人主義というものが潜在している集団主義である、といわざるをえない。

2. 分岐

韓・日の集団主義は、その根源を等しくしながら地理的風土環境の差異により、分岐するようになる。日本には、3,000mをこす高山が7つもあげられているが、韓国では最高峰白頭山が2,744mである。日本の利根川は322kmであるが、韓国の洛東江は525kmに達する⁴⁷⁾。これにより、両国の地勢がどうか推察できよう。

日本では、高峰・溪谷にとりかこまれ地縁的に空間的に集団主義が形成され、これを守る為に武勇を尊ぶ気風が強くなった。韓国では、地勢が比較的平坦であつたので、地縁的傾向は比較的弱くその代わり血縁を重んずる気風が強かった。そこで、その集団主義は自ら血縁的となり、これを守る為には常に文理の道を明らかにすることが求められた。ここで、地縁・血縁等といっているが、これは何も縁故あるもののみで経営しようとするものではない。従業員も含む全員を縁故ある集団と考えるのである。

ところが、韓・日にはともにこの集団主義全体の変異が重大な問題としてさし迫っている。次に項をあらためこの問題を考えよう。

3. 変異

日本における、実質国内総生産の中、農林水産業が占める割合は、1970年5.6%、1990年2.6%である⁴⁸⁾。韓国は、これが1991年7.7%、1994年7.0%となっている⁴⁹⁾。韓・日の集団主義が農耕を基層文化として形成されたものとすれば、最近におけるこのような産業構造の激しい変化につれ、当然変動がおこるものと考えられよう。殊に、未来に向かって工業化・情報化の産業構造が一層深化されるであろうことを考えれば、尚更のことである。

なお、経営をとりまく環境は深刻な不況にみまわれ、リストラクチャ・リエンジニアリング・減量経営等の必要が強調されている。そこで、終身雇用制・年功序列制等のいわゆる集団主義的経営は変容ないし破壊されるのではないかとおもわれ、韓・日ともに既にその実施の兆候もあらわれている。世界的に競争がきびしくなっていくなかで、能力主義を実施し人員をも削減したい衝動にかられるのは自然の成り行きかも知れない。

それは、何千年かの農耕稲作時代に形成された条件化行動が、それ以前何十万年間の間に刻まれた本能的行為に向かって漂流するものであろう。

4. 対応——行動の自己調整

それでは、集団主義は放棄し本能漂流に任せ去るべきか、あるいは任せざるを得なくなってしまうのか。そして個人主義、特に成熟していない個人主義に流されてしまうのをそのまま座視すべきか。そういうことになれば、それは必然的にいわゆる「米英型資本主義」につながる事となる。これが、企業活動の唯一の基準は収益であるべきであり、労働者や社会福祉への考慮は市場の合理性を歪めるから排斥すべきであることを原則とし、いたるところで貧富の差を激化し雇用を破壊しているということについては、既にふれた。

ここで一つのケースをあげよう。台湾においてアメリカ企業A社と日本企業M社が競いあった。オイルショックによるきびしい不況にみまわれた。A社は巧妙な手段を弄して多くの社員を解雇した。ところがM社は500人近い余剰人員を抱えていたが、一人も解雇せずにもちこたえた。「不況で解雇をしないM社」は台湾で大変な好印象を与え、その後営業成績も社員の一致した協力もあって、みごとに立ち直ることができた⁵⁰⁾。

環境が、ややきびしくなったというので成り行きのままに、この変異を放置すれば、成熟しない企業の利益しか考えない個人主義が忽ちはびこり、築きあげた集団主義は一気にくずれ、失業は増え有効需要は減り、それこそ図式通りの社会不安が訪れるであろう。

集団主義は、企業とともに従業員のみを同じ集団と考えるだけではない。成熟した集団主義は消費者も地域社会も、ひいては自然環境とともに「われわれ」として考えるに至るのである。

何十万年に及ぶ永い間にわたり、確かに個人主義がほとんど本能的行為に形成されたであろう。しかし、その後何千年間に及ぶ間、産業構造の変化につれ水利施設等の協同の必要に迫られ、集団主義が相当に条件化行動として成立した。

この何千年間は何十万年間に比べればほんとうにとるに足らない、あっという間にすぎない短い

期間であろう。けれども、われわれの日常生活における時間に比べれば決して短い時間とはいえない。

今日、産業構造は確かに農耕時代をはなれ工業・情報化時代、ひいては社会環境・人間環境を大切にしなければならない時代に入っている。農耕稲作等の時代は水利構造等の為に必要な条件として協同・集団の理念が起った。ところが新たな時代においては、もろもろの新たな構造が新たな意味における協同・集団を必要としている。その為にもっと強い条件として、この協同・集団の理念をわれわれに迫っているのである。これは遠い未来においてもおそらく変わらないであろう。

人間の行動は、環境の刺激に反応してそのまま起こるものではない。入力された情報は、いろいろな方法により選択され比較され、記憶の中に貯蔵された他の情報と結合して再構成されて出力されるのである。この過程において人間は行動の自己調整（self-regulated）を行う。人間は、直接的なあるいは間接的な経験によって、自己の行動の遂行基準を樹立し、外的強化がなくても自ら樹立した基準を遂行しようとする。遂行基準は倫理・道徳律によって一層強化される。人類の歴史は、正に自己調整の歴史であったといえよう。

突然変異には環境にてらし有益なものと有害なものがあり、有益なものが残るのである。集団主義は倫理・道徳律の高い自己調整の遂行基準となり、これに適應するものが有益なものとして残るであろう。

たとえ、個人主義の波がおし寄せることがあっても、これにそのまま押し流されることなく妥当な当然あるべき遂行基準を樹立し、これを遂行してこの波に対応しなければならない。千億におよぶneuronと数百兆にのぼるsynapseが数限りもなく幾重にも幾重にも重なりあって連結されている人間の頭脳は、必ずやこれを解決しうる英知を生み出すことであろう。

VII 結論

序論において提起した問題に対する一応の解答をここに呈示して、結論に代えよう。

その1、(狩猟・採集時代の共通性)：韓・日と欧米はともにその原初の生業は永い間狩猟・採集であり、その基層文化もまたその根源は共通的にこれによるであろう。

その2、(農耕・牧畜時代の共通性)：ヨーロッパにおいても狩猟・採集時代がすぎ、ほぼアジアと同様な時期に農耕・牧畜の食料生産時代があった。

その3、(生業と文化形成の根拠)：稲作農耕には一層集団による協同が、狩猟には個人の能力が重視されたので夫々集団主義・個人主義が形成された。

その4、(稲作の起源と伝播)：稲作は、雲南を中心とするいわゆる「東亜三日月地帯」にて始まったが、いくつかのルートを経て、約3,000年前ないし約2,500年前までの間に、相ついで韓・日に伝来した。このとき、これを通じ韓・日の間には深い連繋があったであろうし、この時代ヨーロッパに稲作は行われていない。そこで、この点は生業の態様における、ヨーロッパと韓・日の決定的な相違となる。

ここで、単純に韓・日は農耕、ヨーロッパは狩猟というようにはいえないことが明らかとなった。ことさら対比していうとすれば、韓・日は稲作、ヨーロッパは狩猟というようにいうべきであろう。

その5、(生物と環境の生理学的遺伝学的根拠)：生物は、細胞の中に核をもち核はその中に更に遺伝子がある。遺伝子はDNAの中にある。DNAは自己増殖し次代につながり安定的・保守的であるが、固定的ではなく、たまたま突然変異をおこす。突然変異には有益なものと有害なものがある。環境に適応するものは有益なものとして残る。脳の中にもこのような神経細胞があり思考力・精神的な作用もここから生まれる。なお、これには興奮を促進せしめたり、抑制せしめたりする力がある。従って、人間の思考傾向も環境により生理学・遺伝学の原理の影響をうける。

その6、(集団主義の変異と対応)：韓・日は集団主義だといっているが、そのもっと深い基底には何十万年間に形成された本能的行動として個人主義が潜在しているであろう。環境の如何により、その後数千年間に形成された条件的行動である集団主義が時により本能漂流するのはありうるのだ。しかし、人間には自己調整の能力がある。集団主義には高い倫理・道徳律がある。自己調整は、この倫理・道徳律による遂行基準を設定して、これに向かって行動する。おし寄せる個人主義の波にただ流されることなく、この自己調整力を十分発揮するように、対応しなければならない。この地域に折角培われた貴重なものをそう易々と放棄することはできない。

きびしい現実さらされて、なかなか理想通り実施できないことは十分ありえよう。しかし、それを「終身雇用制時代はもう終わった」等と恰もそれが当然なことのようには考えてはならない。歴史の流れは、よせては返し返してはまたよせて流れ流れる。一時的な環境の変化により、やや動揺があるとはいえ少なくとも数千年に亘り築かれた条件化行動が、たとえそこに潜在的要素があるとしてもそうたやすく消失するとは思われない。已むをえず現実的行動をとる場合といえども、万已むをえない異例的な措置であると考え心構えが望ましい。

リストラ等の名において人員を減らすのはもっとも安易な方法である。この方法によって、決して経営体質は強くないであろう。それによって人件費は、減少し収支計算上有益な点が多少あるとしても、その為に経営においてもっとも大切なものを失い、むしろ経営体質が弱くなるのを免れない。いつ整理されるか分からず不安にかられている社員が働いている経営の体質がどうして強くなりうるだろうか。人間の能力を、最高に発揮できる安定した温かみのある経営組織こそ、その体質をもっとも強くするものである。

新しい環境に応じて集団主義経営行動が、存続するか、変容を呈するに止まるか、それとも崩壊してしまうのかは、ひとえに、これに対応する意識如何にかかっている。条件化された倫理的行動が、ときに本能漂流することがあっても、自己調整力がこの漂流をどれ程強く本来の流れにもどしうるかの問題であろう。

〔注〕

- 1) これに対し、日本の集団主義は大正中期より昭和初期にかけて成立したとする説もある。しかし、住友家の家訓等により江戸時代より既に行われていたとする経営史的検証も行われているので、一応やはり基層文化に根ざすものと考えるべきであろう。宮本又次・作道洋太郎、『住友の経営史的研究』、実教出版社、1980、81頁。鈴木幾多郎、「日本の商人の思想と行動」、『総合研究所報』、桃山学院大学総合研究所、Vol.11, No.1, 1985.6, 18～19頁。
- 2) 深田祐介、ロナルド・ムーア、『日本型資本主義なくしてなんの日本か』、光文社、1993。
- 3) 野田信雄、「『この国の危機』の正体」、『文藝春秋』、1996年6月号、191頁。
- 4) 同上書、188頁。
- 5) 拙稿、「日本の経営と韓国的経営の比較と課題」、稲別正晴・金在紋、『環太平洋圏企業経営への提言』、同文館、1995、164・165頁。拙著、『生産과生活』、嶺南大学校出版部、1995、766～767頁。
- 6) Richard F. Thomas, *Brain*, 金基錫訳、『脳』、星苑社、1989、15頁。石田英一郎外3名、『人類学』、東京大学出版会、1970、13、17、20、27、30頁。金元龍、『韓國考古學概説』、一志社、1973、51～52、59、61、65、73、83～86、168～169、193頁（洪積世が始まる年代については、石田外文献と金元龍文献との間に相違があるが、一応金元龍文献によることにした）。
- 7) 金基錫、前掲書、15頁。
- 8) 石田外、前掲書、13頁。
- 9) 同上書、20～36頁。
- 10) 金元龍、前掲書、50頁。李春寧、「稲作의文化와韓日關係」、韓日文化交流基金、『韓日古代文化의連繫』、서울프레스、1994、1頁。
- 11) 石田外、前掲書、13頁。
- 12) 同上書、37～40頁。
- 13) 同上書、52～58頁。
- 14) 李春寧、前掲稿、26頁。
- 15) 同上稿、5頁。
- 16) 同上稿、3～4頁。
- 17) 申琦澈・申瑢澈、『시우리말큰사전』、三省出版社、1978、601頁（Narakとは稲のことであるが慶尚・全羅・忠清・江原の諸道でつかわれているとされている）。
- 18) 李春寧、前掲稿、25頁。
- 19) 賀川光夫、「縄文時代の農耕」、『考古学ジャーナル』、2、1965。「縄文農耕に関する一問題」、『考古学雑誌』、52巻4号、1967。「稲作의起源에관한몇가지問題」、韓日文化交流基金、前掲書、28頁。
- 20) 石田外、前掲書、81～87頁。
- 21) 石田外、前掲書、89頁。
- 22) 金沢庄三郎、『廣辭林』、三省堂、1925、204頁。
- 23) 前掲、拙稿、159頁。拙著、759頁参照。
- 24) 石田外、前掲書、89頁。
- 25) 同上書、93頁。
- 26) 石田外、前掲書、91頁。
- 27) 同上書、96、97頁。
- 28) 同上書、96～103頁。
- 29) これには200万年説もあるということには既にふれた（註10参照）。
- 30) W. D. Stansfield, *Theory and Problems of Genetics*, 1983、沈載昱外2名訳、『遺傳學』、文運堂、1、3頁。

- 31) 同上。
- 32) 同上書, 303頁。
- 33) 梅原猛, 「脳死・安楽死と日本人」, 『文藝春秋』, 1996, 8月号, 130~131頁。
- 34) Å : angstrom, $1 \text{ Å} = 10^{-10} \text{ m}$, $200 \text{ Å} = 2 / 100,000 \text{ mm}$
- 35) 金基錫, 前掲書, 11頁。李秀遠外13名, 『心理学』, 1989, 34, 45頁。
- 36) 金基錫, 前掲書, 28頁。
- 37) 李秀遠外13名, 前掲書, 50頁。この考えは身心一元論的思考である。脳はneuronの単位によって支えられているが, Neuronの莫大な量の奥妙な集積がある段階に達すると「心」「意識」等の特異な機能をおこす。二元のようであるが, やはり一元といえよう。(室井尚, 『文学理論のポリテイク』, 勁草書房, 1985, 204, 212~213頁。)
- 38) 李秀遠外13名, 前掲書, 54, 55頁。
- 39) B. R. Hergenhahn, *An Introduction to Theories of Learning*. 金澤塚訳, 『学習心理学入門』, 1988, 147, 149~150頁。
- 40) 同上書, 303, 304頁。(形態主義論者は, この精神構造分析に成功できなかった。しかし, これらの理論は認知心理学者により受けつがれ最近一層の発展をとげている。李秀遠, 前掲書, 17~18頁。)
- 41) 芝垣哲夫, 『言語と文化の構造』, 創元社, 1987, 141~157頁。
- 42) 同上書, 149頁。
- 43) 野田, 前掲稿, 188頁。
- 44) 深田外1名, 前掲書, 35頁。
- 45) 野田, 前掲稿, 188~189頁。
- 46) 植村省三, 『組織の理論と日本的経営』, 文眞堂, 1982, 172~173頁。
- 47) 浅井泰範, 『ジャパン・アルマナック』, 朝日新聞社, 1993, 25頁。申琦澈・申溶澈, 前掲書, 615, 1391頁。
- 48) 浅井, 前掲書, 57頁。
- 49) 財政経済院, 『経済白書』, 1995年版, 218頁。
- 50) 深田外1名, 前掲書, 211~212頁。